

『オックスフォード』交響曲は、1789年いわゆる一群のパリ交響曲とロンドン交響曲の間に作曲され、ドーニ伯爵に献呈されたものである。それを音楽学者C. バーニーの推奨によりロンドン大学から名誉博士号を送られた際、学位授与式の席で演奏し以後この名称で知られるようになった。全体は4楽章構成で、オーケストラの豊潤な響きや各楽章間の有機的な関連性は、ハイドン（1732～1809）の熟練した手法を聴かせてくれる。が第一楽章の形式については賛否両論あり評価のわかれるところである。第三楽章のメヌエットは、いかにもハイドンの舞曲的な雰囲気を残すモーツァルトとは隔絶の感があり、トリオのリズム感はベートーヴェンに通じて行くものである。音楽学者H. クレッチュマーは、『オックスフォード』をハイドンの『エロイカ』と評したという。

『ピーターと狼』は、プロコフィエフ（1891～1953）が1936年に作曲したもので、「子供のための音楽物語」という題が付されている。音楽と朗読を結びつけたこの音楽物語の手法は、ストラヴィンスキー作曲『兵士の物語』の系譜を引き継いでいる。また子供向けの音楽というのは、青少年への啓蒙的な芸術音楽の入門曲が欲されていた当時の要請によるものである。がしかし、決して軽音楽であるとか容易な音楽であるとか言うものではない。簡明な表現を用いて抒情性を訴えるということであり、饒舌でなく表現の集約ということなのである。プロコフィエフが、ソ連の社会をどのように理解していたかは異論のあるところだが、社会主義的リアリズムからの影響が、この簡明な表現にあることは確かである。またこの物語をひとつの風刺と見る見方がある。狼が当時のナチス党の独、ファシスト党の伊を表しているというものだ。……とすれば、小鳥を狙い損なった猫はスターリンで、当の小鳥はプロコフィエフの心といえるであろうか。

交響曲第一番、ト短調『冬の幻想』は、チャイコフスキー（1840～1893）が1866年に作曲したものである。彼が26歳に、新設のモスクワ音楽院の教授となった時の、いわば就任作品である。彼は、ロシアの中流家庭に生まれ幼少の時から神経衰弱症的であった。弟であり彼の最初の伝記を書いたモデストと共に同性愛者でもあったようで、その原因は母親への過度の偏愛と神経症にあった。14歳の時、彼は母親を失うがそれから重度の神経衰弱症に悩むこととなる。結果論的に言えば、この神経衰弱症の最終的な解決策として彼は音楽の道に進むことになるのだ。がこの解決不可能な背反は、彼の作品中至る所で聞き取れる抗しがたい宿命という主題で、不可能なものへの絶望的な歩みとして呈示されている。多くの評論家の間で社会性を指摘される彼の作品は、国際問題や農奴制度への表象として受け止められる時があるが、そうした時でさえも個人的過ぎる無信念の対応や盲目的排他主義として評価されるのは、以上のような彼の性向によるものだろう。がしかしその無信念の対応や他を容れない個人主義は、民族を単位とするロマン主義である民族主義と結びつき、大自然への、つまりロシアの荒涼とした平原への思い入れとなり、『冬の幻想』で表出されているものの底流となっている。

全体は、4楽章構成になっていてメンデルスゾーンの重流であった彼の師ルビンシテイン的な交響曲形式を枠とし、グリーンカのロシア魂を柱としている。第一楽章「冬の旅の幻想」と第二楽章「陰気な土地、霧の土地」が中心部分で、第三楽章のスケルツォと民謡「咲け、小さな花よ」を主題とする第四楽章が続く。クラリネットとフルートによる木管音のブレンドがオーケストレーションの特徴であり、また第二楽章の第一主題が彼独特の楽想で聞きどころであろう。

（藤井部 勉）